

## アジアへの草の根交流と鹿児島

桑原季雄・尾崎孝宏  
鹿児島大学法文学部

### *Kagoshima and Grass-roots Exchange toward Asia*

KUWAHARA SUEO and OZAKI TAKAHIRO  
*Faculty of Law, Economics and Humanities,  
Kagoshima University*

#### Abstract

In 2005, we started a collaborated research on bullfighting. From our research we found that such peripheral prefectures as Okinawa, Kagoshima, Ehime, Shimane, Niigata and Iwate have been directly connected with each other through bullfighting both in individual and small municipality levels, and actively promoting grassroots exchange by holding National Bullfight Summit Meeting every year. Furthermore this grassroots exchange through bullfighting looks to have an edge of going around the world by being connected to the Korean municipalities which have been regularly holding bullfighting. This is a totally new perspective against the vertical perspective of 'Center-Periphery', which has long been a dominant perspective of 'City and Rural Area'. Thus we got the perspective of 'Periphery-Periphery Network'. If we take a look at Kagoshima with this analytical framework, we could realize anew that Kagoshima was a pioneering prefecture for developing this 'Periphery-Periphery Network' by initiating 'Karaimo exchange program' and 'Karamojia project' in 1980s. That is, Kagoshima was a far front runner in grassroots exchange in Japan. In this paper, we try to discuss on the possibility of the grassroots exchange in Kagoshima in relation to Asia in global age by reevaluating Karamojia project from the viewpoint of 'Periphery-Periphery Network' and the examination of the grassroots exchange by Bullfighting Culture among the peripheral areas.

Keywords: 闘牛, 周辺—周辺ネットワーク, 草の根交流, からいも交流, カラモジア運動

#### 1. はじめに

発表者らは2005年に、闘牛に関する共同研究を立ち上げた。その研究を通して分かったことの一つは、鹿児島（徳之島）、沖縄、愛媛、島根、新潟、岩手といった、現在の日本では「周辺」と位置づけられるような地域同士が、個人および市町村レベルにおいて闘牛を通して直接結び付き、毎年「全国闘牛サミット」を開催するなど、活発な草の根交流を展開しているという事実であった。さらに韓国の闘牛開催地の自治体などとも結びついて闘牛の草の根交流の輪がアジアへすでに広がっており、さらに世界へと展開する勢いだ。これは従来支配的であった「都市と地方」といった垂直的な「中央—周辺」的視点とはまったく異なった視点を開いてくれる。かくして我々は「「周辺—周辺」ネットワーク」という視点を得た。この視点で鹿児島を見ると、1980年代にすでに鹿児島は全国に先駆けてアジアを舞台に「からいも交流」や後の「カラモジア運動」という「周辺—周辺」ネットワークを展開していることにあらためて気がついた。つまり、鹿児島は草の根交流の最先端を独走していたのだ。本報告では、カラモジア運動を「周辺—周辺」ネットワークの視点から再考した後、さらに「闘牛文化」による周辺同士の草の根交流の検討を通して、鹿児島とアジアとの関係のなかで、グローバル化時代の草の根交流の可能性について考えてみたい。

## 2. 闘牛を介した草の根交流

### 2.1 闘牛ネットワーク

2004年10月23日に新潟県長岡市を中心に大きな地震があり、中越地方一帯が深刻な被害を受けた。中でも最も被害が大きかった地域の一つが闘牛で知られる山古志村（現長岡市）であった。その山古志村の牛はその後南へ1500キロメートル以上も離れた徳之島に緊急避難的に送られ、現地の闘牛大会にも参加していたことがわかった<sup>1</sup>。こうした事実から、闘牛の盛んな地域同士の間には緊密な闘牛のネットワークが存在することがわかる。また、闘牛の開催地あるいは生産地として知られる沖縄、鹿児島、愛媛、島根、新潟、岩手の6県の間には、闘牛の主催者団体・参加者・牛のいずれのレベルにおいても広域的な「闘牛ネットワーク」が形成されていることが予測される。

日本で現在闘牛がみられるのは、南から沖縄（うるま市）、鹿児島（徳之島町、伊仙町、天城町）、愛媛（宇和島市）、島根（隠岐の島）、新潟（小千谷市、長岡市）、岩手（久慈市）の6県9市町である。中でも現在最も盛んなのが沖縄、鹿児島、愛媛の3県である。また、沖縄には11ヶ所、徳之島には13ヶ所、そして愛媛県では宇和島市に1ヶ所の闘牛場があり、1年を通して闘牛大会がそれぞれ30回、20回、5回ほど開催されている。中でも徳之島では、全島一の横綱を決める大きな大会が1月、5月、10月の年3回、しかも徳之島町、天城町、伊仙町の3町持ち回りで、午前中から開催される。島根の隠岐の島町でも年に3回、新潟では小千谷市で定期場所と観光闘牛の合わせて18回、さらに長岡市でも4会場で年間9回開催している。岩手では久慈市（旧山形村）で春と夏の年2回開催している。闘牛ドームを有する地域も増えて、現在、徳之島町、宇和島市、隠岐の島町にドーム付きの闘牛場があり、沖縄のうるま市に平成19年に新たに闘牛ドームが完成予定である。

また、徳之島町の牛主に対する調査から、牛主個人が、沖縄、岩手、新潟、宇和島の各地に足を運び、現地の闘牛関係者と独自のネットワークを形成し、牛の情報や子牛の買い付けが盛んに行われてきたことも判明した（尾崎・桑原・西村,2006）。

### 2.2 全国闘牛サミット

闘牛サミットは、1998年に、隠岐の島町役場が全国闘牛サミット協議会事務局になって発足した。その目的は、闘牛という貴重な伝統文化を有する市町村が一同に会し、文化の保存・伝承と相互の交流、親善を深めるとともに、伝統的資源を活かした個性豊かなまちづくりを図ることであった。

2005年5月3日午前、伊仙町の伊仙闘牛場で開催された「第8回全国闘牛サミット記念闘牛大会」には、徳之島内外から約5000人の闘牛ファンが参加した。鹿児島県知事、伊仙町町長、徳之島闘牛連合会会長、韓国清道郡の議会議長などが挨拶し、また、新潟県中越地震で被災した山古志村（現長岡市）から徳之島に引き取られた闘牛が花形戦に新潟代表として登場し、話題になった<sup>2</sup>。

また、徳之島闘牛連合会が主催して同日開催された第8回全国闘牛サミットには、全国の闘牛文化を守り続けてきた5県7市町村の首長や闘牛団体の代表者、そして韓国からも11名が参加した。サミットでは、全国の闘牛開催地同士のネットワークを構築し交流を深めるとともに、国外にも闘牛の魅力を発信していくことを確認し、闘牛文化を地域資源として活用していくことなどが話し合われた<sup>3</sup>。

このように、今や闘牛は国境を超えて、民間主導で国際交流の促進にも大きく貢献しつつある。とりわけ、日韓両国のあいだでは、政治的相互理解が停滞していたなかで、日本の周辺部においては、闘牛を介した草の根の交流と相互理解が中央政治の頭越しに進んでいたのである。換言すれば、日韓の間でも、あるいは国内においても、国民の多

くがその事実の存在さえ知らないところで、これまで長年に渡って闘牛文化を育んできた人たちが、闘牛を介して、ユニークな草の根の交流ネットワークを形成し、交流の度合いが年々増しているという確かな現実が存在するのである。そして2006年9月には、第9回となる全国闘牛サミットが、中越地震から復興間もない山古志で開催された。被災後初めて山古志村で行われる闘牛大会には、遠く徳之島、沖縄、隠岐の島からも牛たちが戦いにやってきた。2007年の10回大会は沖縄県うるま市が、全天候ドーム型の闘牛場完成の祝賀をかねて行うことになった。今回の闘牛サミットでは、各市町村代表が今後の課題などについて所見を述べ合った。牛の頭数確保対策、闘牛の観客増加策、BSE問題への対応など、闘牛を取り巻く文化社会的な問題に関する現状報告が、各市町村の行政関係者よりなされた。そして、最後に第9回闘牛サミット宣言が採択された（尾崎・西村・桑原, 2007）。

### 2.3 韓国との闘牛交流

韓国の闘牛は、慶尚北道の清道（チョンド）郡で毎年韓国の全国大会が開催されている。また、韓国との交流は1999年に和牛3頭を韓国へ2年続けて送り、韓国の赤牛と対戦させたことに始まる。日韓戦と銘打ったおかげで、釜山の近くにある知名度の低かった清道郡の闘牛場は、総計数十万もの観客を集めるほどの大イベントが開催できたとのことであった<sup>4</sup>。また、徳之島へも親善大使や全国闘牛サミット（2002年の第5回と2005年の第8回、2006年の第9回）へ来賓が訪問したりするなど、ここ数年「国際的」な闘牛の交流が展開されてきている<sup>5</sup>。さらに、韓国の闘牛業者も一度徳之島に来島し、徳之島の牛を買って伊仙町から韓国に船で移送したこともあった。しかし、狂牛病の問題が発生してからは、韓国でも牛の輸入が禁止となり、日韓交流戦はなくなったが、韓国の闘牛の活性化と闘牛関係者同士の交流には大いに貢献した。また、清道以外にも慶尚南道の晋州（チンジュ）市や全羅北道の井邑（チョンウップ）市などでも闘牛大会が開催されている。

清道や晋州の場合に共通して見られる特徴は、闘牛による地域振興を意識的に展開している点であり、1万人以上を収容する大規模な闘牛場の整備や、闘牛のキャラクター化による経済的展開などが図られている。とくに晋州では、そのような闘牛の観光資源化をとおして、農村地域開発と畜産振興、伝統的な闘牛文化の活性化がはかれるとともに、闘牛場を複合的な娯楽・余暇施設として市民に提供する事業が行なわれようとしている。ただ、現在の韓国内の闘牛開催地間の牛・人・情報のネットワーク形成については、今後の現地調査による解明を待つしかないのが現状である。

## 3. グローバル化と草の根交流

### 3.1 「中央—周辺」と「周辺—周辺」

現在、日本国内で闘牛が行われているこれらの地域は、「進んだ中心」に対する「遅れた周辺」に属するといえる。つまり、そこで想定されてきた関係性は「中心—周辺」を主たるモチーフとするものであり、当然ながら両者の関係は対等ではなく、中心が高く周辺が低い垂直的な関係であった。例えば、情報や人の流れについても、中央にいったん集積され、その後、中央を経由して他の周辺に流れていくのである。しかし、近年、世界的に顕著なIT革命に伴う情報流通体制の変革、特にインターネットの特質である「無頭的」なネットワーク構築の拡大は、こうした中心を介さない社会的ネットワーク構築を可能ないしは容易にした。これがまさに、筆者らの主張する「[周辺—周辺] ネットワーク」に相当する<sup>6</sup>。ここで扱う闘牛ネットワークは、闘牛という、かつては地域社会内部の民俗的慣行として理解されていた複数の事象が、闘牛を構成する様々な要素が

半ば独立的に、半ばリンクしつつ、ただしいずれも中心的存在を介することなく、直接的に結びつくことによって成立したネットワークと言い換え可能である。筆者らの「闘牛ネットワーク」に対する視角として強調しておくべき点は、それを「周辺—周辺」ネットワークの一事象として位置づけている点である。「周辺—周辺」ネットワークという表現は筆者らの造語であるが、それは簡単に言えば「国家や都市といった中心性を媒介しないネットワークの形態」（尾崎・西村・桑原,2007）である。

### 3.2 「周辺—周辺」ネットワーク

すでにみてきたように、現在の闘牛開催地と闘牛牛の生産地は、主に、離島・僻地・農村といった後進的・周辺の性格を有してきた地域であり、そのような地域同士が人や牛や情報の交流を行い、ひいては「全国闘牛サミット」のような交流の新たな展開を見せている。こうした事実は、単純に先進的な都市と後進的な僻地という「中央—周辺」的な二項対立図式では理解できない、むしろ「周辺—周辺」系の社会関係の存在意義を示唆するという意味で、きわめて今日的な特徴であると言える。換言すれば、闘牛に關係する地域間の交流の性格が、近代化・都市化してきた日本でこれまで支配的だった「中央—周辺」あるいは「都市—地方」といった二項対立的なものではなく、周辺同士が中央を介さずに直接結びついてネットワークを形成するという現状が水面下で進展しており、これこそが、まさに情報化時代のひとつの新しい交流形態のあり方を提示しているように思われる。

### 3.3 グローバル化と「周辺—周辺」ネットワーク

従来、「中心—周辺（周縁）」の議論で盛んにいわれたのは、中心に対する周辺の従属性や、逆に中心を活性化するものとしての周辺の存在であり、周辺は常に中央との関係でしかその存在価値を認められなかった。他方、闘牛開催地同士に見られる「周辺—周辺」ネットワークの形成においては、周辺同士が対等に関係しあい、双方が活性化しようという特徴を有する（桑原・尾崎・西村,2007）。即ち、周辺が他の周辺との関係においてその存在価値を發揮するのであり、そこには中央の介在を必要としない。こうして、闘牛における「周辺—周辺」ネットワークは、世界中の個人が相互にインターネットを介して関係し合うという情報のグローバル化と類似の様相を呈する。換言すれば、闘牛開催地間に見られる「周辺—周辺」ネットワークの形成は、グローバリゼーションの進展度合いを映す様々な鏡の一つであり、また、グローバリズムの世界への新たな入口の一つと言える。グローバル化が、世界中の巨大都市をネットワークのハブとして、中心から周辺へと圧倒的な影響力が及ぶというのではなく、辺境や周辺から、そして草の根から積極的にグローバル化時代へのもうひとつの入り方を試みている点で、闘牛ネットワークの事例はとて興味深い事例の一つといえる（桑原・尾崎・西村,2007; Kuwahara, Ozaki and Nishimura, 2007）。

筆者らの闘牛ネットワークに象徴される「周辺—周辺」ネットワークという捉え方は、現代のキーワードである「グローバル化」という言葉を出てきた考え方であるが、鹿児島では国際化という言葉がキーワードであった1980年代に「からいも交流」や「カラモジア運動」に象徴されるもう一つの「周辺—周辺」ネットワークが既に形成されていたのだ（加藤,2001a,2001b）。そこで、以下では、まず最初に、ある意味で「周辺—周辺」ネットワークのプロトタイプとでもいうべき「からいも交流」から「カラモジア運動」への展開を見てみよう。次に、「周辺—周辺」ネットワークという観点からカラモジア運動の再評価を試み、さらに、闘牛ネットワークにみる「周辺—周辺」ネットワークとの比較からグローバル化時代の「周辺—周辺」ネットワークの持つ可能性について述べ

てみたい。

## 4. 鹿児島と草の根交流

### 4.1 鹿児島と異文化交流

「からいも交流」や「カラモジア運動」の生みの親である加藤憲一氏によれば、鹿児島と異文化交流の歴史は古く、かつ他の地域と比較してもその特異性が際立っているという<sup>7</sup>。まず、鹿児島は今日まで日本の南の玄関口として外来の様々な文化の重要な入り口の一つでありつづけてきた。例えば、遠く遣唐使の時代、南西諸島の「道の島」づたいに中国の宗教や政治経済制度などがもたらされてきた。また、稲作や鉄砲、キリスト教、サツマイモ、サトウキビなども南の方から鹿児島を經由して日本に入ってきた。さらに、近代では、明治維新の火ぶたも鹿児島からきっておとされた(加藤, 2001a:16)。そして、近年においては異文化交流の斬新な手法である「からいも交流」が、そしてその発展型として、日本のNGOの草分けとも評価される「カラモジア運動」が加藤憲一氏の手によってこの鹿児島の地で産声を上げたのである。このように、鹿児島は、京都、大阪、東京という日本の歴史的、政治経済的中心からもっと遠く離れた地であるにもかかわらず、時代の革新的な情報・文化の受け皿であり、かつ日本を変革する情報の発信地であり続けてきたのであった。

### 4.2 「からいも交流」の発想

「からいも交流」の考案者、加藤憲一氏は、徹底して出身地である鹿児島、それも過疎に悩む大隅という地方に目を向け、地方から大胆な発想を展開した。氏曰く、「世界が国境なき時代に向かって進んでいくとき、地方は世界と手を結び、自立の道をさぐるべき」(ibid. : 15)であり、その自立の切り札は、「地方のもつ「距離」と「余裕」だ」という。消費、情報、カネといった文明の力では、中央に及ばないが、「物を育て、人をつくり、心をなごませ、文化を交流し、自然と共生する力は、地方が大きい」と主張し、地方こそが、「生産性と効率一辺倒だけでない社会のライフスタイルを創造し、その情報を限りなく世界に発信する」(ibid. : 16) ことができるのだと主張する。

こうした主張の原点に氏の次のような郷土に対する歴史認識がある。「わが郷土には誇るべき歴史がある。(中略)隼人の反乱、遣唐使、倭寇、鉄砲・キリスト教伝来、南蛮貿易、密貿易、薩英戦争、薩摩藩留学生、明治維新、そしてMBC(南日本放送)派米高校生の系譜に、同じ血脈と鼓動を感じた。本土南端の地にありながら、こんなにも中央政府・アジア・世界の歴史にその存在を刻み付けた薩摩の歴史は、海外交流の歴史」(ibid.)であった。そして、本土南端から見つめるべきは中央ではなくむしろアジア・太平洋であり、そこから一つの国際化構想、すなわち「南方圏構想」が生まれたのであった。これは、地方と世界が結ぶ新たな地方主義を軸に、「草の根交流、地球人の育成、アジア太平洋時代への参画、南北問題への対応」(ibid.)などを織り込んだ構想であった。加藤氏は、1981年8月に鹿児島に帰郷し、同構想をからいも交流およびカラモジア運動へと結実させたのであった。

そもそも、加藤氏の目に写った故郷鹿屋の人口流出が、まさに「表土の流出」であり、「村の砂漠化現象の始まり」であった。そして、失われた郷土の活気を再生するための方策とは、新たに表土を作ることであった。しかもその土は外から、「異文化という「客土」を村に持ち込み、交流を通じて新たな「表土」を創造する」(ibid. : 22) というのだ。そして、その異文化交流の中から育むものは「土着の文化」であり、この「土着のシンボル」こそ身近にあった「カライモ(さつまいも)」(ibid.)であった。「カライモは、江戸初期に南方から琉球をへて薩摩に伝わってきた異文化である。シラスの大地に

しっかりと根付いたこの一粒種は、ある時は食料として、ある時は飼料・原料として郷土の産業や文化を育て、薩摩人の生活のシンボルとなってきた。現在でも多くの農家が生産し、焼酎産業を支えるその経済的貢献は計り知れない」(ibid. :22-23)。このカライモのように、薩摩は海外交流の恩恵を十分に活用したのであり、それこそが郷土の発展の原点でありバネであった。その第二のカライモこそが「人」であるという(ibid. :23)。世界中の人を鹿児島に招き、地域の人間との間に交流を起こすことこそが、土着と世界を結ぶ「からいも交流」となるのだ。そして、第二のカライモともいべき「人」として、加藤氏が注目したのが「在日留学生」である(ibid.)。

このようにして鹿児島でスタートした「からいも交流」は日本における、いわゆる草の根交流の元祖として定着した。即ち、毎年春と夏に、アジアを中心に世界の若者達が南九州の農村を訪れ、鹿児島や宮崎の各家庭において、2週間家族として生活を共にするホームステイプログラムである。

当初、受け入れ家庭では、留学生を受け入れることへの戸惑いが大きく、必ずしも順調ではなかったという。例えば、農家の戸惑いの原因は、人様に見せられるような家ではないことで、食事、寝具、トイレなどが大きな壁となって立ちはだかった。それに対して、加藤氏と行動をとともにし、受け入れをお願いする地元の農業青年たちは、日常生活の中にこそ価値があるのだと説得したという(ibid. :43-44)。こうして、受け入れ農家の、「家ごとにかく古い」という悩みは留学生の、「この家は、歴史のある家ですね」との驚きの言葉により、「古い家」から「歴史のある家」へと認識が変化する。同様に、庭先の畑から菜っ葉を摘み、味噌汁の具にしている受け入れ農家の朝食の風景も、「毎日、新鮮な野菜が食卓にのびります。この素晴らしい自然を大切にしてください。これがある限り、第二の故郷としてまた戻ってきます」の一言で、「この田舎に住んでいるからこそ、留学生が来てくれる」という目覚めにつながったという。つまり、「留学生は田舎の生活を写す鏡」であり、留学生が、日常に潜む価値を拾いだし、それを示し、再認識させてくれたのだ(ibid. :131)。

#### 4.3「からいも交流」から「カラモジア運動」へ

この「からいも交流」の輪は1985年夏、アジアの農村へ広がり、さらにアジアとアフリカの農村を対象にした貧困撲滅・環境保全・人材育成活動と、ケシ撲滅のためのキャンペーン、タイ、中国連携型開発協力へと発展した。若者が村を捨て、都会に出ていくという、鹿児島が抱える問題は、アジアの留学生の村でも同じだという。

鹿児島の受け入れ農家が留学生へ、アジアの農家が受け入れ家庭へと大きく変化することによって、従来の一方向的に受け入れるだけの「からいも交流」から「カライモ+アジア交流」、即ち「カラモジア交流」が誕生した。そして、アジアとの新たな交流の担い手として登場するのは、地方自治体と、からいも交流のようなNGO(非政府組織)であった。加藤憲一氏曰く、「地域が直接アジアと交流して幅広いネットワークを形成し、学びあい、助け合いの「共生」システムを実質化できれば、アジアの心は開かれる」(ibid. :222)のであった。

こうして「からいも交流」のイモヅルが、アジアの農村に向かって根をはりめぐらそうとする時に、国家の介在はほとんどない。この、地域と地域を結び、アジアとの真の対話と連帯を求める交流の可能性をさぐる会議として1985年、「第一回からいも交流アジア会議'85」が鹿屋市のホテルで開催された(ibid. :222)。受け入れ家庭、留学生、そしてアジアのNGOが直接手を結び、ついに一本の糸が紡がれ始めたのだった。それは「多様なアジアを発見し、真の対話と連帯を求める」(ibid. :225)ものであり、その手始めとして「まず、農村間の人材交流から始めたい」(ibid. :228)というのだった。

からも交流が始まって4年目にして、いよいよ舞台も「交流」から「協力」へと広がり、リレー走者も「留学生」から、第二走者「NGO」にバトンタッチされた (ibid. : 230)。1985年8月に、鹿児島県の農業青年7人が東北タイを訪問したのをきっかけに、からも交流は大きな転換期にさしかかっていた。即ち、「交流」から「協力」へ、「地域」から「アジア」へと脱皮し、「周辺から周辺へ、農村から農村へ。首都を経由しない地域同士の交流、すなわちカラモジア運動がはじまった」(ibid. : 304) ののである。この「カラモジア運動」こそ、筆者らが注目する「周辺—周辺」ネットワークの元祖であり、プロトタイプであった。

カラモジア運動は、からも交流から発展したカラモジア郷構想に、鹿児島県を引っ張り出し、タイ、フィリピン、インドネシア、モンゴル、ベトナムに手を伸ばし、ついにはミャンマーで環境、農業、教育、麻薬撲滅などの総合的な地域開発に取り組んでいった。また、日本のみならず広くアジア諸国が共有しつつある問題に、都市と地方の経済格差や情報格差の拡大、都市化と地方の衰退、地方の過疎・高齢化、離農、環境破壊等の問題があり、その深刻な諸問題の解決に率先して取り組み、成果を挙げてきたのは、国が主体となった国際交流や国同士の交流協定ではなく、民間主導の草の根的な交流の実践であった。その最もいい例のひとつが鹿児島県の「カラモジア運動」であったといえる。

#### 4.4 カラモジア運動の再評価

上述のように、鹿児島における代表的な草の根交流としてのからも交流からカラモジア運動へという大きな流れを見てきたが、それでは、からも交流とカラモジア運動の違いはそもそも何であろうか。まず、からも交流の大きな特徴は、すでに見てきたように中央の都市に集まってくる留学生を周辺の農村へ招くという点にある。即ち、停滞した農村の活性化に、海外から中央に集まってきた留学生という異文化の人間を入れて活用する。その際、留学生と鹿児島との間に、常に「中央」の留学生が鹿児島という「周辺」にやって来るという「一方向的な交流」の構図が存在し、これは一見、「中央—周辺」的關係と見える。しかし、これは、周辺から中央へ働きかけて中央を周辺のために活用するという点で、中央が周辺を利用・搾取し従属的地位に追いやるという従来の「中央—周辺」の關係とは大きく異なり、むしろ「周辺—中央」的關係と言い換えることも可能である。つまり、農村の人間は中央から迎えるだけで、逆に中央へ出かけていくことはないのである。他方、中央から留学生を周辺である鹿児島に受け入れるといっても、やって来る留学生が中央の采配によってではなく、自主的あるいは主体的にやって来るという側面を重視するならば、両者の關係は、鹿児島という周辺が日本の中央を介さずに、海外の留学生と直接結びつくという点で、これも一種の「周辺—周辺」關係といえる。

次に、カラモジア運動の特徴についてみるならば、それは、アジアの研修生を農村に受け入れて農業技術の研修を行うのみならず、逆に、鹿児島県の青年をアジアに派遣して農業技術の指導にあたり、かつ同時に現地で学ぶという意味で「双方向的な交流」といえる。さらに、日本全体としての視点で見れば、日本の一地方である鹿児島県が北の先進国ではなく、「南」の発展途上国である東南アジアと交流するという点において、さらに言えば、日本の周辺地域の一農村が世界の周辺地域の一農村と交流するという点において、まさに「周辺—周辺」的交流といえる。

以上の議論から、「からも交流」の前後と「カラモジア運動」への一連の流れを図式的に示すならば、以下のように言うことが可能であろう。即ち、からも交流以前の地方と中央の關係は「中央—周辺」的なものであったのが、からも交流の誕生により

「周辺—中央」的關係へと変質し、さらに「カラモジア運動」へと発展するに至って、その關係は「周辺—周辺」的關係へと変貌を遂げていったのである。

## 5. グローバル化の時代の草の根交流の可能性

上述のように、鹿児島を代表する草の根交流である「からいも交流」とその発展形である「カラモジア運動」は、高度経済成長と共に出稼ぎ・離農・過疎・高齢化が進み、一つの生活と文化が消滅の危機にある現代の日本の農村から思考し、従来の「中央—周辺」的な交流モデルに対し、「周辺—中央」的交流モデル、そしてさらに「周辺—周辺」という周辺地域同士の交流へと発展してきた。また、「中央—周辺」的交流は、その交流のあり方が中央を介してピラミッド型の非対等な交流となるが、「周辺—周辺」的交流は、中央を介することなく独自に対等で自由なネットワーク型の交流に参入することが可能となる。即ち、この「周辺—周辺」モデルあるいはその応用的展開こそが、今、地方が中央に依存しない自立的、脱依存的關係を構築するために最も必要とされている方策の一つではないだろうか。換言すれば、この「カラモジア運動」型の「周辺—周辺」モデルをもう一度焼きなおし、これからの時代に広く応用可能なモデルとして再構築し提示することが今、まさに求められているのである。

我々は、「カラモジア運動」の「失速」<sup>8</sup>にも多くのことを学ぶことができる。それは、何よりもまず、「周辺—周辺」ネットワークを海外に向かってフル展開する前に、国内で十分に鍛えあげることが必要だということである。カラモジア運動は、国内においてしっかりとした「周辺—周辺」ネットワークを構築できなかったことにその弱点があった。即ち、カラモジア運動は、本来、国内でまず「周辺—周辺」ネットワークを幅広く構築し、その耐久性や持続性、発展性さらには普遍性といったことに関する十分な臨床データを得たうえで海外へと展開すべきだったのではないだろうか。そうした意味でいえば、闘牛ネットワークはまず国内で構築され、ネットワークとしてある程度定着し安定したところへ韓国という海外へのネットワークが一本延びて繋がった形になったといえる。今後、このネットワークは中国やその他の闘牛開催地と繋がっていく可能性を十分に秘めている。このように国内のネットワークが十分な強度を有すれば、たとえ海外に伸ばしたネットワークの一つに不具合が生じてもネットワークシステムそれ自体の耐久性に問題は無いといえる。

さらに、カラモジア運動の実験から学べるもう一つの教訓は、ネットワークで展開する交流が技術的なものだけに偏ってはいけないということである。交流に確実性と持続性をもたらすものは「技術」という「情報」よりもむしろ、例えば牛のような確かな「モノ」や闘牛という「文化」を介した交流である。ネットワーク上を往来するのは単に技術などの情報ばかりでなく、むしろ確かなモノや文化に裏打ちされることが重要であろう。その意味において、筆者らの主張する闘牛ネットワークはモノと文化を介した、あるいはモノと文化に裏打ちされた交流形態であり、「周辺—周辺」ネットワークの最も確かなモデルの一つといえよう<sup>9</sup>。

## 参考文献

尾崎孝宏・桑原季雄・西村明

2006 「東アジア沿海地域における闘牛をめぐるネットワーク形成の現状」『鹿児島大学法文学部紀要「人文学科論集」』第63号, pp. 31-58。

尾崎孝宏・桑原季雄・西村明

2006 「闘牛を巡る情報発信とネットワーク形成」『奄美ニューズレター』（鹿児島大学）No.27, pp. 9-17。

尾崎孝宏・西村明・桑原季雄

2007 「周辺＝周辺ネットワーク」の形成と特質について—闘牛ネットワークの事例より」『鹿児島大学法文学部紀要「人文学科論集」』第65号, pp. 25-48。

加藤憲一

2001a 『カラモジア運動の20年（上）NGO辺境からの挑戦』毎日新聞社

2001b 『カラモジア運動の20年（下）NGOグローバリズムへの挑戦』毎日新聞社

桑原季雄・尾崎孝宏・西村明

2006 「東アジア沿海地域における闘牛をめぐるネットワーク形成の現状 予備調査報告2—八重山調査より」『鹿児島大学法文学部紀要「人文学科論集」』第64号, pp. 51-83。

桑原季雄・西村明・尾崎孝宏

2007 「闘牛ネットワークのフロンティア—国内博物館と海外の事例より—」『鹿大史学』第54号, pp. 1-31.

桑原季雄・尾崎孝宏・西村明

2007 「東アジアにおける闘牛と「周辺—周辺ネットワーク」の形成」『南太平洋研究』第54号, pp. 52-71.

Kuwahara, Sueo, Takahiro Ozaki and Akira Nishimura

2007 Transperipheral Networks: Bullfighting and Cattle Culture in Japan's Outer Islands, Shima: The International Journal of Research into Island Cultures Vol. 1 No.2 pp. 1-13.

西村明・尾崎孝宏・桑原季雄

2006 「沖縄、徳之島および宇和島の闘牛に関する比較研究」塚原潤三・長嶋俊介編『南北連続「新・道の島々」センサーゾーン拠点形成～地球温暖化学際研究前進拠点と国際・地域貢献～』（南太平洋海域調査研究報告No.46), pp. 167-179。

## 新聞資料

産経新聞2004年11月12日夕刊

南日本新聞2002年10月11日

南日本新聞2003年10月9日

南日本新聞2003年10月15日

南日本新聞2003年10月16日

南日本新聞2004年5月14日

南日本新聞2004年5月21日

南日本新聞2004年5月22日

南日本新聞2004年5月25日

南日本新聞2005年5月4日

南日本新聞2005年5月5日

南日本新聞2006年8月7日

## 註

<sup>1</sup> 中越地震で被災し、奇跡的に生き延びた山古志村の闘牛3頭が、平成16年（2004）年11月に伊仙町の一家に引き取られ、うち一頭は平成17（2005）年5月の全国闘牛サミット記念大会に出場した（南日本新聞2005年3月24日, 5月4日, 5月7日）。

<sup>2</sup> 3頭のうち、マキバオーが花形戦で徳之島デビュー戦を飾ったが、あっけなく敗れ

てしまった。対戦当日は山古志村のかつてのオーナーも長岡市の仮設住宅から駆け付けて声援を送っていた（南日本新聞2005年5月4日）。

- <sup>3</sup> 闘牛が貴重な観光資源あるいは地域興しの有効な手段という認識が示された（南日本新聞2005年5月5日）。
- <sup>4</sup> 韓国南東部の清道郡では1999年から日韓戦を目玉にした闘牛大会を開催し、1998年は9日間に韓国全土から約70万人が観戦に訪れたという。2001年に日本で牛海綿状脳症（BSE）が発生して牛の渡韓が禁止されるまで徳之島から6頭の闘牛が渡韓した（南日本新聞2004年5月14日，同5月21日，同5月22日，同5月25日）。
- <sup>5</sup> 徳之島と韓国の清道郡との交流は、1999年3月に、同郡の「闘牛祭り」に伊仙町の永田信治氏が闘牛3頭を連れて渡韓して参加し、その返礼として同年7月に同郡の企画担当者らが伊仙町を訪問したのを機に始まった。翌2000年3月に再び永田氏が闘牛3頭と共に渡韓すると、「日韓闘牛戦」として大きな話題を呼んだ。同年5月には清道郡の郡守ら10人が徳之島3町を訪問し交流を深めた。その後、2003年10月にも伊仙町の主催による「日韓闘牛文化交流」が3町を舞台に開催され、清道郡から郡守や郡議会議員等12人が来島した。（南日本新聞2002年10月11日，同2003年10月9日）
- <sup>6</sup> 闘牛と周辺一周辺ネットワークの関係について、筆者等はすでにいくつかの論考を発表してきた（尾崎・桑原・西村,2006；西村・尾崎・桑原,2006；桑原・尾崎・西村2006；桑原・西村・尾崎,2007；尾崎・西村・桑原,2007；桑原・尾崎・西村,2007；Kuwahara, Ozaki and Nishimura, 2007）。
- <sup>7</sup> 「からいも交流」は昭和57（1982）年3月に鹿屋市など1市2町で始まり、昭和62（1987）年5月には財団法人「からいも交流財団」が設立され、平成11（1998）年春に財団法人「カラモジア」に名称変更した。詳しくは加藤,2001a,2001b 参照。
- <sup>8</sup> 財団法人カラモジアは、平成4（2002）年2月に、基本財産1億7,000万円の取り崩しによる事実上の破綻が発覚し、平成8（2006）年8月5日の理事会と評議委員会で解散を決定した（南日本新聞2006年8月7日）。約20年の歴史に幕を閉じたカラモジア運動は、その直後、NPO「からいも交流」に引き継がれた。
- <sup>9</sup> カラモジア運動の「限界」についても一言付言しておきたい。カラモジアは、運動の海外展開に伴って、その遂行に莫大な外部資金を要するようになった。つまり、カラモジアにおいては、人の相互派遣が不可欠であったが、当初はインターネットの活用というような、物理的な移動以外の代替手段がなかったのである。またウシのような「貨物」はともかく、人の国際的移動には、船であれ航空機であれ、鹿児島からの直行便がないため、「中心」という足枷から完全に自由になることは困難であった。即ち、人の移動に伴う諸経費の増大という点では、無視できないほどにその体質を変化させていったことも、カラモジア運動の自由を奪い重石となっていったという意味で、一つの限界とみることができよう。ただし、この問題に関しては、さらに踏み込んだ議論が可能であると思われるが、本稿では最小限の指摘に留めておきたい。